編集後記

2023年度にはコロナ禍による制約も僅かとなり、大学の研究活動にも活気が戻って来ました。今林直樹はサバティカル研修を認められて論文を執筆。私は12月に、4年ぶりに沖縄に行くことができました。

今回の旅で特に印象深かったのが、フクギ並木で有名な備瀬集落です。琉球王国では18世紀前半以降、森林の荒廃を憂慮した宰相・蔡温の指導により、各地で植林活動が行われました。この時に基盤となったのが、中国の風水をアレンジした「抱護」の思想です。集落の四方を林が取り囲むようにフクギやテリハボクを植え、良い「気」が漏れ出ないようにする。個々の家の周りにも木を植えて資源とする。備瀬の並木は、この方針から生まれたものです。

実際に見てみると、フクギの木は思ったよりも高く伸び、葉も相当分厚いものでした。根と根が互いにしっかりと結び合っている様子は、地表に出ている部分からも明らかです。容易なことでは木が揺らがないことが分かります。

気候変動による猛暑、自然災害の増加が深刻化している中で、こうした屋敷林の重要性が注目を浴びつつあります。木蔭で覆うことで家屋の温度を下げ、冷房の使い過ぎ等を防ぐと同時に、住民は台風などの強風からも守られます。勿論、木が多いことはCO_2を減らす上でも有効です。根が強いため、津波や高潮の際には防潮林・救命の具にもなり得るとされています。風水思想の妥当性はともかく、抱護林はまさにSDGsの時代にふさわしいものですね。300年も昔の政策が、現代の社会においてこそ必要なものとなっている。自然の声に耳を傾けていた古人の知恵の深さが分かります。

琉球最後の国王、尚泰王（1843年～1901年）の作と伝えられる琉歌に、このようなものがあります。

「ひじり賢しの残すい言葉や　肝（ちむ）の玉みがく砥石さらめ」

「肝」というのは「心」を意味します。古の賢者たちが残した言葉は、心の玉を磨く砥石のようだ。それを用いて心を鍛えよ、というのです。この「残すい言葉」には、「抱護」のような知恵も含まれるでしょう。これからも南島研究を継続することで、「肝の玉」を磨きたいです。

（文：栗原　健）